義経勲功

義經勲功圖會前編巻之二

目録

Yoshitsune Kunkōzukai sen hen

鬼若乱行并剃髪改名之條

義經勳功圖會前編巻之二

伊勢三郎属牛若丸條

且説御曹子ハ。美佐崎が館をのがれ出馬に鞭をあげて落延たまひけるが。夜既に明はなれければ。少し心を安んじたまひ。村老に路をとひ給ふに。前路を横山のもの。室北八島志野の河関山などへ告奉つる種もあり志す方へ来まず。播次にも室の八しまにて待といひしかども本道を行ば。美佐崎が追人に逼られても面倒なり。且ハ紀みちを行むやとて。郷民に案内をとひ隅田川辺を東へ路を駒をとどめ給ひあやしき里の宿に二日路を只一日に馳りたまひ。上野國板鼻といふ所にいたり給ふに又既に其日も西山に没し。前路暗く。原来不知案内なる事なれば。其所此所と呻ひたまひ。乗たまふ馬も疲るる躰なるしく。餓にさへ臨む世なれば。御身躰も氣力なく大いに困みたまふ

一村しげる杜乃奥に一点の燈火幽に見えけれバ。扨ハ人家有と嬉しく思召。立倚て見玉ふに。あやしの萱屋あり。年久しく住荒したると見えて。木立物ふり苔に埋る柴乃編扉格子も半部ふんと寂寞たり。頓て駒を寄下立て。是ハ行暮たる旅人にて路に迷ひ宿を需の難渋に及ひ候。苦しからずハ一夜を明させ玉へと言入玉ふに。主と覚しく二十許の女乃声にて。障子乃影より。安き御吏なれども。主ハ宿に侍らず。今夜更てや帰り候はん。人に勝て情ある者にハ候へど。留め参らせ却て何なる辛目を見せ奉んも量られ候はず。よし〳〵なき所に宿かり玉はんより。他乃家を御頼候へと答へける。御曹子亦仰けるハ。よし〳〵夫も苦しからず。家主の御帰宅有て。兎角仰あらむ。其時何方へも罷出ん。今宵一夜ハ留て明させ玉へ。色をも香をも知人ぞしる。馬を外の方に繋ぎ置き

遠侍へ伴ひ入て坐しぬ。女ハ此御言葉にや愧たりけん。実や一樹の蔭に宿り。一河の流を汲も一世ならぬ吏と承りぬ。奉見まで哉御年の程も若く見え玉ふに。未だ知らぬ旅路に吟ひ玉はんも痛し。其処も余り見苦しく候。何処までも陋の住居妨嫌ひ候へども此方へとて。一間へ請じ種々の菓酒飯など。信くしく持出て参らせたれバ。大なに悦び玉ひ厚く謝して十分に喫し玉ふ。女ヤゝ有けるハ。此家乃主ハ世に勝たる荒者にて候へバ。相構て見付られ玉ふなとて。灯を消障子を引立て寝玉へ。八声乃鶏啼侍らバ起し参らせなんと。悃に言て奥乃方にぞ入りぬ。御曹子思召けるハ。彼女を如何なる男持てる。是程にハ懼るらん。索もてる家主ハ山賊強盗の徒ならめ。何計の吏かあらん。よし無礼を働かバ何の為に佩たる太刀ぞ。金味見せてくれんず物と。二寸許抜かけて膝の下にし。消せよと云し燈を殊に明くかゝげて臥玉ふ

伊勢の三郎牛若君に属する図

とひいし障子廣く引開直垂の袖を顔に押當て。空睡して窺ひゐたり。斯て其夜も四更と覺しき頃表乃扳戸荒らかに押開く入来る者あり。須波主乃男よと。直垂乃下よりさし覗を見れば年齢廿五許なる男身の丈六尺余なるが。芦の葉染し直垂に萌黄威乃腹巻なし長き太刀を横帯。右手に手鉾提左手に炬火揮照して入来ふ。後に續て同じ程乃若者四五人或ハ猪の目彫なる大鉞或ハ薙鎌棒長刀亦弓箭服狭き。胡簶肩なぐり。唯今事に逢たるよと見えて眼を瞋り息つき荒く打入て。母屋の簀子に立躊り さる荒木造乃四天王とも謂べし。何さる弱き女が懼るも理よとて尚も空睡して窺ふに先の男一間に人在と見て。大眼を光らし白眼回しつゝ裡へいりぬ。如何なる事をかいふらんと。壁に耳を當て聞ふ。彼男悪さげなる声して。やよくとあるけなく呼起すに稍有て寐おれし

きぬして。唯今海ぞとのひやといふに。男声を怒らし。一間に居るハ如何なる者ぞと咎む。女答て。さんは不知旅客なるが来到ぬ。路に日を暮て行方ハ遠し。一夜の宿と宣へども。良人の留主なれバ叶ひ侍らぬよし申せども。色をも香をも知人ぞなると。仰て黙止がたく見へさせ玉ふ其御詞の耻しさに。一夜の宿を参らせぬ。若き旅人乃事なれバ。今宵一夜を何か苦しかるべき。曲て旅宿を参らせ参へしぞ申せる。男呵くと打わらひ。さてハかゝる扇齣の人なれバ。むくつけき人とのミ思ひ慢しに色をも香をも知人ぞなるとの詞に愧て宿参らせしとや。あら艶しや今宵一夜ハ何か苦しかるか應きしとぞ申たる。御曹子心中に感じたまひ荒夷にも似気なく情ある者かな。悪さげなる吏が申さるゝ詞も名刀の錆になさらんも。その命冥加にさくべかひなるよと。微笑しなひ給ひも耳を清して聞ゐへしが。彼男の声に客人乃辞が合んるに遠くこ

乗なん構へて人を偏しけるにて。是も平治の乱に亡び失し。左馬頭義朝が末子に牛若とて。或鞍馬に登り出家得道なさせ居られしが聊所存有て鞍馬を忍び出奥州へ赴き。今の名を左馬九郎義経とぞなりしとぞ曰ける。主の男是を聞て大に驚き。傍に席を就志さり。低頭平身して荒涙を流し。須臾ものも不得言有けるが。稍有て鼻をすゝりて思ひまはらず手は争ひありまする事ハ恐有ながら我が為には重代の主君にて候へばや。斯申上るも何不審は無し。原来某が父ハ。伊勢国二見能連とて申て。大神宮の神職にて候ひけるが。一年九條上人と同船仕りし代明筆の讒言に依て咎められ。伊豆国長島といふ所へ流され。年月を経にける配所の徒然を慰んと妻を迎へけりしに程なく。懐妊仕りて有七月と申に父ハ不図病死仕りぬ。其後母ハ某を産子ながら。母が方の

叔の家に養育せられ。月満て安産し伯父の情にて某を生し立て某成長に従ひ。父ハ如何なる人と問ひに。母洞ながらに委く物語しけれバ扨ハ父ハ伊勢能連と承まして。其より伊勢三郎能盛と名乗ハ母平素申けるは汝が父能連ハ頭殿と主臣の約をなし。大恩を蒙りたり。源家の恩を忘却なせそと教訓仕りし。故天晴源家の公達に随逐し。粉骨砕身しても恩恵を報じまゐらせんと思へども。悪さに平治の乱の後ハ平家の一門権柄を掌握し。源氏の公達ハ或ハ誅せられ或ハ流され。散々に成果て其中勢なく無念の光陰を送りぬ。平家の粟を食しても心にもなき切取強盗をなし。今日迄露命を保ちしに。三世の奇縁空ずして。君不斗爰屋に宿らせ給ひ。尚名をしのび給ふ事。年来の望も此上やは有べき。是偏に八幡大菩薩毘沙門天の憐せ給ひしにてぞ候。嬉しき涙にくれけり。御曹子も大きに

御存なり人目要もあれ今の身なれば名乗あへず主従となのらく
事の不測さよ。是も家の滅亡なれば無念に思ひ。何卒大義を思ひ立
驕る平家を伐亡し源氏の世となさばやと。奥秀衡を頼みて下
らんとして。深栖光重および三條橘二が事赤阪にて熊阪を討。美佐崎
が断して是迄落延来りし追手。落もあらず語まひりたれど。三郎夫婦その
膽略勇敢を感じなり。殺て主従の御觴を賜り諱の一字を頂戴し
て。是より能盛を義盛として改めける。去程に長物語に其夜も明渡り
けれど。御曹子を橘二が事気遣ひしく。立出んとの気色なれど
義盛妻に向ひ千金の御身を独り旅路に赴かせまいらせんやうなし。某
も若者ともに倶に奥の近迄送まいらせん和女は前を残して郎黨ともに留守
を寄て明年の春を待べし。其頃も送りたれ。何方へなりとも再会
縁はべ。武士のならひの命を君になするよし再会の期も量がたしとや

ありけれど妻を伏沈み。彼物の旅だちにも主の留主は物憂に。是を永き別
になるやとしと神ならぬ身の思ひきや。願くは奥までともせんと迄も
倶して下されと泣ければ。義盛気色損じ浩る大義を抱ふ君の
御供して。秀衡の方へ到らん身の義盛にて恩愛の契を捨てゝ
妻を具して下りしよし。奥の武士に指さゝせんとや。其義ならば永く
離別せんぞかしと眼を怒らし叱りけれ。妻も大に驚き前に寸
せしを妄り理なり。必ず御供やましし。宥させ給へとて赤面くして泣
伏けり義盛漸く色を和らげ。跡の事とも何是と託し。剛の者の
辞として引も及さぬ梓弓。唯一筋に思ひ切。御曹子の御供し。住馴
し故郷を跡になして出行けり

牛若丸秀衡対面　并　六韜三略之傳

御曹子は道すがら義盛を得給ひ。御旅斜ならず。足柄を立て駒を

急がせる程に宇津宮明神を遥拝し。行方原にさしかゝり[illegible]
将の射たる後と眺めん的の野辺の白真弓押張て[illegible]
浅香の沼の花がつみ。且見上れバ古歌の郭さへしるき浅香山おもかげ
に知れたりと思の里を越行ば。此所ぞ名にいふ伊達郡。厚樫山にまじ
りし里のことぶき。前路に見道を急ぐ旅客あり。御曹子仰けるハ此山ハ當国
の名山とし聞えたり。殊勝ましき事あれかし彼旅人ハ志らるゝぞや。中よ義盛彼呼
止めて言問よしの御給に御まゐりけるに。走行まふく物問ハさんと待
つるぞと呼なまれ一声。旅人も何事にやと後へ振返る。御曹子馬上よりの
是ぞ人なるに。別人ならず橘二末治なりけるぞ。大に悦び玉ひ。如何
にや橘二なにとハおきさうと仰あれ。橘二急に馬より飛下り。在る節に
頭を低。扨も君美佐崎が方へ入せられし。室の八島にて待と仰け
るを。待どもしかんのみぞ。しかしや。先へ下りなれとも心あらず

是迄来りしに逢奉りし事の嬉しさよと言上す。御曹子も御悦有
美佐崎が事を志らく討られしと曰ぞ。橘二兄弟今の事の様に思ひ
身を戦慄して恐入り。扨御供の人ハ如何なる人にやと問まするに。是ハ上
野國足柄の者にて。吾為にハ相傳の郎黨なりとて。義盛が由緒を語
り給ふ。橘二大いに悦び。よくぞ是迄御供しつれ。去ながら此度の御下
向を偏に穏便の御事なれば。足下等ハ是より古郷へ帰り時節を
待のべ。故郷の人の御物思も思ひやられて痛しくハ須波君の御
大事と関東へ。如何にも早く来りまるべなど言上ぞ。御曹子も復
く。故郷へ帰り期を待ハべと仰あるにぞ。義盛力なく。さらばとて
御暇申上橘二に善く頼み置て。赤足柄へぞ帰りたる。夫より
西手迄足を待く待たるぞ久しかりける。御曹子をば又橘二に傳奉
て道を急がせ給ひ。名にしおふ武隈の松をながめ。逢隈川を打渡

牛若丸初て秀衡に對面の圖

宮城野の原榴ケ岡千賀の塩竈籬が島都の土産にと称しられん安
根羽の松が丸よそふにみえて。栗原寺にぞ着にける。播二ひとまづ別當
乃坊へ入まいり。躬ハ平泉に馳到て秀衡に謁しくやなる八兼て申
あまし源氏の公達左馬頭義朝公の御末子遮那王殿御曹司に
在しが勧まり。當國迄御供申は尾州の大宮司季範が許にて御首
服あり。今の御名ハ源九郎義経公と申まいり。栗原寺の別當乃坊に
入まいりけれバ急ぎ御迎が参らせまへとぞ申ける。須臾秀衡ハ風邪に
犯されて病床に臥居るまじが。大に悦び嫡子西城戸太郎国衡。二男伊
達冠者泰衡が呼て申けるハ。昔甞夜霊鳩一羽家内へ飛入と夢見たり
何様吉瑞あるらんと思しが果して播二未治が働にて源家の公達當
家が頼て遣くとの御下向して参あるとぞ。恐多く此君ハ清和天皇の御
末左典厩乃八男に渡らせまふぞ早く御迎に参まとし命じ給ひ

衡泰衡いづれも一際美麗に鎧し兵三百五十騎が随て。栗原寺へぞ馳
参りけるが其跡にて秀衡ハ。病中ながら手足を清め烏帽子召て内
外の掃除に直恵がありけ。且近臣をめし倚邸宅を拂へよ。庭乃落葉拾ひ
草引よと指揮し。今や遅しと相待まゐる。心遣を殊勝なり。國衡
泰衡ハ栗原寺へ馳到。御迎ひ申上まいらせ。御曹子御喜悦限なく。両
将に案内させまゐ。栗原寺が立て平泉の城へ参りまふ。別當の坊が
丸衆徒五十人が為御供させまゐりぬ。程なく平泉にて着
玉へしかバ秀衡出迎て上段の間に請しまり。先御人品が見奉るに
前に諸し如き美男にて。然も武毅才略面に顕まし自然と大将軍の機
が具足しまへば。感激の余りに涙が流し。低頭平身してやさしくなるへ
秀衡が偏鄙の恵もし不思議に千金の御身の遥くと御下向ありまし参
さよ東新くば上ハ愚息よし。ハやかに及ぶず奥羽両國の大小名三百六十

人御幕下に随遂させ守護なしまゐらん。假令ば清盛日本中の勢を盡して攻来りとも。微塵に打砕かん事何の難き事かあらん。今日よりハ我が泰山の安きに置時節を待て大義の御旗を翻させ給へと。家臣に言上せしかバ。御曹子も厚く懇志を謝し給ひ。偏に秀衡を頼思召よし仰ありける。秀衡領掌し。嫡國衡安衡及び郎党共に對ひ。君此度當國へ御下向有し事。偏に橘次末治の才覚に依てぞ。秀衡が秀衡と思ハん者ハ。橘次に引出物せよとぞ申されける。依て嫡子國衡白皮百枚鷲の羽百尻葦毛馬十疋白鞍置てぞ引たりける。是に劣ず二男安衡も。鎧の引出物を与へければ。其余の一族郎党我もくと引出物をする程に。橘次ハ身を埋る如くに積重なり。秀衡是を見て打笑ハ鹿の皮鷲の羽絹布太刀刀も今ハよも不足あらじ。吾も高辺り好む所の引出物せんと貝摺したる唐櫃の蓋に砂金一蓋入てぞ取

せたる。橘二ハ余の嬉さに。將に是貨の山に入し心地し。此度君の御供せずバ。赤坂の驛にて熊坂が為に貨物を奪ハれ命を失ハんに。其難を避今亦斯莫大の引出物を得る事の嬉しさよ。是偏に鞍馬山の多聞天の御利益ならんと。深く信仰し。秀衡父子に拜謝し。平泉を辞して夫より交易の事をなし。果ハ都へ登りける。斯て御曹子ハ秀衡と旦暮大義の商議有と雖秀衡老功の人なれバ。時勢を察するにいまだ其時節到来せずとて。急に兵馬を動すべき躰なし。只御曹子をして秀衡の子息等と弓馬の術を励ミ学ばしむ。就中奥州ハ良馬を産するが故其頃天下随一なりしが。御曹子ハ馬術を鍛錬あるに。天性の奇才なれバ。遂に其妙所にいたり。今も高岸に飛上り。深淵を躍越るなど。実に心の侭なれバ。国人其堪能を見聞して。驚嘆せずといふ者なし。御曹子亦思召けるハ吾既に剱を振ひ弓を弾て敵を討事ハ。恐くハ天下に右に出

者有けり。然と雖ども衆心が察し。百勢が絶しく。籌が帷幕の裡に廻らし勝事が千里の外に決する術陣法變化の法が不知何者ぞ良師が得て。兵学に通ぜざやと秀衡に此義が宜べし。則一族佐藤庄司元治が師範にまりぬ。御曹子大いに悦び有て。是より戦場の進退陣列の變化が寝食が忘て学究ぬ。元治其智才が感嘆し君が古與の俊傑なり。中々某ごとき短才が以て。教導しまいらん事不能とて。無度辞退の色あまりし。御曹子曽て許しなければ。益師弟の礼が厚しくて勧学有しが。一時元治に向ひ。足下は此類なる兵道の達人なるが。往昔隣國にも足下の如き士有やと問ふ。元治微笑し。某等が如き未熟短才なる者を。斗が以て量車に積ぐ籌以往あり。伝なぐら。須彼御大事に及人時何斗の役にか立ん間に兼る都に吉岡鬼一として諸家の書籍に通じ。公の御見出に預り。六八流に

中秘書が朝廷より預奉りし是ぞや當時兵道の達人とも中々其きにと語り進む。御曹子嗟嘆しまひ我朝にハ在なから鞍馬の山中にて成長師の膝下にのみ在しかバ。さる者在るも不知き。是や鞍に燈臺下暗といへる類なるらめ。そも其韜三略とハ如何なる書にやと問ふ。元治が曰某なれども東夷ハ争ふさる秘書が知ひ奉き只傳来りける往昔人皇六十代醍醐天皇の御宇。延長元年癸未五月春宮文学が好ませ給ふにあまり左大弁宰相大江維時に命じ。儒書及び聖經賢傳兵書に成讀不せよとて。砂金千萬兩が賜りて入唐させしめ給ふ。維時勅が奉り萬里の波濤が凌て異域に渡海し。先五萬金が唐朝の王照に宗帝に献じ。五萬金を龍取将軍に進て。儒書兵書に至く所得と雖言語殊に偏にして其義通ぜざりしかバ延長元年より承平の頃に迄凡大明に留りて後經三史文撰に通ず。其成功によりて

にハ我満仲義家にハ不及とも如何にもして都へ登り鬼一が家に身を
倚其書を懇望して一見もする事を得ば怨敵たる平家を亡さん事掌
の裡に有。鬼一とても許容せざらんば一太刀に切害してなりとも奪取んものと思召
是より唯都へ登ん事をのみ思ふといへども秀衡に告なば自然都へ洩れ
又吉岡が用心せんも図りがたし。心中深く秘し。秀衡父子にも告
ハず。假初の遊行の如くにて平泉を立出密に都をさしてぞ急ぎけり
されハ平泉にハ翌日まで御曹子の見えさせ給はねバ頻に驚き八方へ手配して
尋ねさせ給へども不知ず。詮方なくて止にけり

吉岡鬼一法眼が事

斯て御曹子ハ平泉を忍出駒に任せて馳給ふ程に。日を経て足柄なる
義盛が許に着給ふ。三郎夫婦大に驚き何の為来りけるぞと問ば
否兵書懇望の為都へ登よし仰けれバ。然らバ御供申さん

にハ是より義盛が御供にて東山道へかゝり路次なまで信濃なる
木曽義仲が許に立倚給ひ始て御對面あり。大義の謀を作合され是
より義盛にハ御暇を賜ひ五六日も逗留有て亦も馬にて都へ忍び登り其
頃聖門房ハ山科に住居して有しかバ。窃に身を隱して聖門房と謀を合
し専ら便を需て。吉岡が方へ住込ん事を計りけるに一心の凝ところ金石
猶徹るの習ひ終に所縁を得て。吉岡が方の学僕としてぞ成りける抑此
吉岡鬼一と云ハ伊豫国吉岡の産にて童名を鬼一と呼天性武技を好
亦諸書に通し。諸道の奥秘を不究といふ事なく。希代の博士成けるが
宇治の関白頼長公諸太夫式部大輔盛憲が所縁によりて身近く召
れ常に鬼一々々と呼給ひて其智才を愛給ふ程に鬼一ますます出精して勤
仕せしかバ。御心に合ひ追て出頭して吉岡法眼憲海と名乗宇治殿の
御博士となりしが。遂に其学才天聴に達し。宇治殿へ勅望有て公の

武略の師となさしめ玉ふ。六韜三略の兵書を預させ玉ひぬれバ法眼が
勢天下に轟き。貴賤権門の公達も。皆法眼が門下に業を学ぶのみならず賄賂の
使者門前に市をなし。自然家富栄て。上合宮通今出川に邸地を賜ハせ
良工に命じて花麗の亭宅を構へ。四面に深き堀を湛へ。三径に橋を
渡し。門擬堅固に営て夜ハ橋を引て猥に人の出入を許さず。さるが
ら城郭のごとく。亦高貴の御殿造に等しく。栄曜栄花に飽世を心
の侭に暮しけり。然るに鬼一牛若君を弟子となして兵道を教授す
るに。一を聞て百を察さるの闊達度量あれバ。弦然として。此若君
ハ人中の龍ともいひつべし。何さま成功の日を俟バ天下に聞ゆる博識と
も成らめと懇に教導しけり。さりながら彼秘書をバ石櫃に納め
深く秘蔵しければ。御曹子も如何ともすべきやうなく。心を苦しめ玉ひし
一夜月の隈なきにまぎれ。館の泉栽を其所此所と逍遥し玉ふに不意の

物好と見えて。泉水築山樹木草花の植さまも。名山勝地の摸様を
写し同もあやに造なせしかバ。御曹子殆ど興に入玉ひ。何となく奥
深く潜りゆくに。一際風流に造たる亭に女の琵琶弾て今様を唱
声聞たり。御曹子耳を欹て立聞玉ふに。法眼に八二男三女有て。男子ハ平
家へ勤仕し。女子ハ夫々に嫁して。末の娘のミ家に残せしと聞しか
ども未ダ垣間見し事なし。察するに彼撥音こそ其末女ならめ。如何成
姿ならんと思より。透垣の間よりさし覗玉へバ。年齢十五六頃なる
べく嬋面玉の如く。緑の黛的歴に花の唇愛敬づき。身に羅綾錦繍
を重着て。長なる髪の飾も奇羅々しく。十分に粧を凝しし人在とも
思ハれず。解たる姿ハ上界の天津乙女月中の嫦娥も斯やと思ハるゝばかり
なく。彼矢矧の浄瑠璃には遥に上越し佳人なりければ。好色の御曹
子。傍目もせず見惚玉ひ。天晴法眼が深窓に寵愛しけるも理

には我満仲義家にハ不及とも如何にもして都へ登り鬼一が方に身を倚其書を懇望して一見する事を得ん。怨敵たる平家を亡さん事掌の裡に有。鬼一もし許容せざらんハ一太刀に切害してなりと奪取んものと思召是より唯都へ登らん事をのミ思すといへども秀衡に告たまハヾ自然都へそれと吉岡が用心せんも圖りがたしと心中深く秘し。秀衡父子にも告玉はず。假初の旋行の如にて立出酒に都をさしてぞ趣きけりありへなる平泉にハ翌日まで。御曹子見えさせ玉ハねバ頓て驚き八方へ手配して尋ねさせしかども不知ず。詮方なくて止にけり

吉岡鬼一法眼が事

斯て御曹子ハ平泉を忍出駒に任せて馳玉ふ程に。日を経て足柄なる義盛が許に着ぬ。三郎夫婦大に驚き何の為来りますぞと問にあるに兵書懇望の為都へ登よし仰けれバ然らば御供申さんにより是より義盛を御供にて東山道へかゝり路次なく信濃なる木曽義仲が許に立倚ぬ。始て御對面あり。大義の謀を仰合させ是より義盛にハ御暇玉ひ五六日逗留有て亦匹馬にて都へ忍び登り其頃聖門房ハ山科に住居しておはしけれバ茲に身を隠して聖門房と謀を合し専ら便を需て。吉岡が方へ住込ん事を計るに一心の凝ところ金石猶徹るといふ。終に所縁を得て。吉岡が方の学僕となりて入込ける抑此吉岡鬼一とやハ伊豫国吉岡の産にて童名を鬼一と呼天性武技を好亦諸書に通じ。諸道の奥秘不究といふ事なく。希代の博才成けれバ宇治の関白頼長卿諸太夫或ハ都大輔盛憲が所縁によりて。身近く召まし。常に鬼一ゝゝと呼て其智才を愛玉ふ程に。鬼一ますます出精して勤仕せしかば。御心に合ひ追て出頭して吉岡法眼憲海と名乗。宇治殿の御博士となりしが。遂に其学才天聴に達し。宇治殿へ勅望有て公の

武略の師となさしめ玉ひ六韜三略の兵書を頭させ玉ひぬ。かくまで法眼が威勢天下に聞え。貴戚権門の公達も。皆法眼が門下に業を学ぶ事へ賄賂の使者門前に市をなし。自然家富栄へ。大宮通今出川に邸地を賜はせ良工に命じて花麗の亭宅を構へ。四面に深き堀を湛へ。三径に橋を渡し。門塀堅固に営み夜は橋を引て猥に人の出入を許さず。さながら城廓のごとく。市高貴の御殿造に等しく。栄曜栄花に飽世を心の侭に暮しけり。然るに鬼一牛若君を弟子となして兵道を教授す法に一を聞て百を察するの濶達度量あれば。該然として。此若者八人中の龍とも謂つべし。何さま成功の日を俟ば天下に聞ある博識とも成らめと懇に教導したりけり。されども彼秘書をば不擅に他に深く秘蔵しければ。御曹子も如何とも可為すべきやうなく。心を苦しめ給ひし。一夜月の隈なきまゝに館の泉栽を其所此所と逍遥しけるに。其の

物好と見えて。泉水築山樹木草花の植さまも。名山勝地の模様を写し目をおどろかす様に造なせしかば。御曹子殆ど興に入給ひ。ゆくともなくて奥深く潜り給ふに。一際風流に造たる亭に女の琵琶弾て今様を唱ふ声聞たり。御曹子耳を欹て聞給ふ。かの法眼に八二男三女有て。男子は平家へ勤仕し。女子は夫々に嫁して。末の娘のみ家に残りとゞまりしかども。未だ垣間見し事なし。察するに彼撥音も其末女ならめ。如何成姿ならんと思より透垣の間よりさし覗給へば。年齢十五六頃なるべくふくよかに嬌面玉の如く。緑の黛的歴に花の唇愛敬づき。身には羅綾錦繍を重着て。長なる髪の飾も奇麗くしく十分に粧を凝し人在ともあらであでやかに靡たるさま上界の天津乙女月中の嫦娥も斯やと思ふばかりなく。彼矢矧の浄瑠璃に八重に上まし佳人なりけれ。好色の御曹子。傍目もせず見惚給ひ天晴法眼が深窓に寵愛しけるも理

牛若君鬼一が娘に私通して秘書を見る圖

よ。何卒此女に言よりて一夜の枕をかはさばやと思へども。流石ちから待居
にも言ず思ひ恍惚としく躬の部屋へ帰りたまひしが夫より八唯夢にも
現にも。彼人の面影のミ立そひて。露忘るゝ隙なし。余り恋に堪兼玉
ひ。法眼が身近く召使。幸壽といへる侍女が潜に招きたまひ。努々口外
まじき面なる事ながら。和御前が信有人と見えけ。頼度こそ事あり
奈何に許諾てんやと曰ぞ。女微笑殺なされぬ身にはいかなる事も及ばん
程の事ハ頼まいらせんと言ければ。御曹子嬉しく思召作らるゝは
吾頃日館の姫君が垣間見たまひしより。夢現にも面影の忘がたく。斯て空
しく恋死ん命が一度の逢瀬にかへまほしと思へども心のたけだに知
らせんたよりなし。生て世々の情にハ此身此事を姫君に告玉はれかし。縦
一夜の間の露と消るとも千万部の経陀羅尼にも勝りて
後世の苦患も免なんと。涙と倶にかき口説たまへば幸壽大いに

是ハ思ひかけざる事かな。宜かな彼御方ハ主の寵愛しのぶ姫君にて
高貴の御方より種々婚儀がれ入あれども中々取敢たまはぬ程の方なれば
なまなかに増て密通なんど思ひもよらず。斯る事の物語がも耳にきかせ奉らバ
命も有まじ。返す返すも御身逆も如何なる珍事にか逢たまはん。此儀ハ不通
と思止り玉へと。気色が変く辞るが。牛若君猶も推て口説たまひ。先に
も言如く。迚も消べき玉緒なれば。よしや一夜の情あらバ。不浮とも師の聴
に違し。姫が縁の因果とならば。刑罰に行されなバ。是本懐よ刃の下に
伏とも。和御前が名をバ露程も顕さじと。実に余義なく頼たまへバ。幸壽
も今ハ争べくもあらじ。左程迄に思召ならば一度の文使なして進せん。御返事なくとも
ことも再度まで許したまへとぞ申ける。御曹子大に悦びたまひ。兼て思の
たけが書認し艶書取出し。必ずよき御返事が聞せてよと言て渡し
たまふ。幸壽ハ御文が懐に押隠し座が立其夜姫が亭へいそぎける

折しも長月半過頃の事なりしが。姫は南殿の簾巻上させ机に倚りて。庭の景
色を眺居給ふ女の童二人ならでは外に人もなかりければ。折よしとて傍
に座し。疾にも不得言。四方八方の物語なんどきこゆるに。姫も打興じ言ひ
けるは。実折節の移り変る中にも古より春秋は殊に勝れて。詩にも歌
にもとりどり賞したまへど。一とせ秋は猶すぐれ。千草の中にも。菊女郎花
なんどの時を得貌に咲乱れ萩の下葉の色附て。露重げになびめ
秋風の吹通るも可笑玲瓏なる月影に三越の雁の渡る音し薄
尾花が下に種々の虫の声しきりなるも身にしみて。春よりも興有とぞ
語りける。幸寿も女童が眠るを幸ひよくよく尚も語に花を咲せ。実
仰せらるる如く。物の哀も秋ぞ勝さると存じ候。万に附て秋わけて
面白き折は侍りしが。琵琶笛などの音も秋の夜などは一しほ澄勝る物
にて。此程御琵琶を遊ばしける館の御弟子の若人御相手を[illegible]

聞とめ給ひ担間見て。現心なく恋慕より今は病の床に臥侍しが。せめて
斯る思出にと書認る文を妾に託し。一度御目にかけてよと。頼み
えぬ節なる事とは思侍れども。若き人の。死居り迄思ひつめて乃
見捨かね是非なく持参まつりぬ。女性も五障の罪深きと。御佛も
説給ひしとか。後世の障ともなる為と思召。御手にふれ給へと袖
より御曹子の艶書を取出し差置れども。姫も思はず顔打赤め
答もなくさし俯首て在せしが。幸寿尚強く諫しかれど。流石に
思ひ。文とり上て閲見に。手跡の妙なるのみならず。詞も優に艶
しく書流し給ひしを其人品の床しく面影立添心地して。操返し
繰返し詠め猶増る思ひ面色なるを。幸寿亦打ゑみ。彼若人も
容貌風姿の勝るのみならず。智者人に秀て。主の殿も他ならず籠
愛せらるる万の業に心得し中にも殊に笛吹事は類なく深[illegible]

殊に秘せるばかりに侍まさん。他所ながら聞せ玉はずやとそゝのかし
兎も角もと乃ゝ答ゆるにぞ。幸壽は仕済たりとて。其夜も己が局へ
帰り。御曹子が招きまちくの更なれど。望の夜彼所に到り。籬の下に
て笛吹のへと進なまきバ。将に是月下翁の赤縄が結びのかすなすくめと。御曹
子ハ龍王と嬉しくのたまひ。其夜ハ打も寐玉はで。東雲が待明し。暮安き秋
乃日も。今日ハ三秋の思ひなしのふに兎角しく時刻にも成られむ。際美く
しく姿制ひ。潜に忍寄。幸壽が言し如く。籬の此方に佇て。年来手馴
あ給ひし葉調取出し。相夫戀の曲が細々と吹澄しの給ふ。二なき上手なれ
ば。其音清雅にして。怨が如く。訴が如く。非情乃虫迄も嫉音にやもち
たりけん。諸声が止て鳴止むと。いとゞ音色で勝なる。姫も此調に心ひかれ
簾の隙よりさし覗むに。月いと明く。衣の色さへ師歴に見えてけん。御身に
て。白綾の小袖が著重ねひ。顕文紗の直垂に。白ぎ大口がめし。薄化粧

に鉄漿黒く。眉位高く造なし。笛吹てぞ佇給ふさま。山陰中納言在五中
将乃童立も斯やと思ハ許なきむ。顔の紅葉を照そへ。胸打さはぐ
許く同じ心が通せむやと。筑紫琴搔取て。同く想夫戀が弾き玉
なきむ。互の意相和して。或ハ別を或を合し。呂律則が不越私語が如く
に異ならば。幸壽も殆ど心耳が清し。吾が忘て聞入しが。稍心つきその
ゝハ何時が期しあんぞと。折戸推開立出て。御曹子の御手が執思乃丈
が定みえ上まへゝく。其身を外の方へ走り出にかり。御曹子ハ今さらに
胸躍膝慄ども。心弱くハともく居へあり。姫も尚更はづかしの。さりとて人に
や知まんと。声ぶに不出ず伏て居たらしが。遂に井出乃下帯解初て。浅
からぬ契があつらのまひたり

牛若丸見潛秘書條

九郎御曹子ハ法眼が娘に契初のまひてより。人目乃関が忍び通路の務

が童孫比目のよしみハ深くなりぬひしが。吃と心に思ひ出へらく。我遁撃難
の大志が抱なれバ。今女色に耽りて空しく光陰を送りなバ。天地神明の冥覧
亡父亡兄の情も恐ろし。當家に膝を屈せしハ。唯彼六韜の秘書を開かん
為なりきぞ。姫が頼みて本意を達し。片時も早く義旗を飜さんものと
思召一夜姫に向ひ仰せらるゝハ。極めて宿世さる奇縁にや。唯假初に契りし
まゐらせしに。哀なる兒心さへ定めし事ぞ。九十九髪のまでもと契り侍るが
元より吾此館に勤学せし事ハ。元来一箇の望ありて。夫をこそ余の義にあらず
當家天朝より預りたる六韜の秘書を一見せんとの為なりしが。師道深く
秘しおかれたるに。今まで是を許されず。御身実に吾を思ひ給はゞ。何卒其書の
在所を知り一見を許し給へ。然らバ吾實名をも顕し。王権の八千代迄も契り
の末を変じ。実に余義なくぞ仰せける。姫大きに驚き。是ハ大方ならぬ
御望なるが。彼秘書ハ公の御宝にして。父君だに私に見る事能はず

石櫃に收め深く秘しまゐらせ。其在所委しく知人なし。此事ハ時節
も候ハめとも。頓に其御宥を許させ給ひ。御曹子尚も姫が心を蕩かし。秘書を開
かせんとのみ益契を深くし。艶言を専らにして。度々所望有しかバ姫もさのみハ
辞んやうなく。潜に庫中に伴ひ石櫃を開きて素書十六巻を見せ奉りけ
るにぞ。天に拝し地に拝して悦び給ひ是より夜毎姫が亭に忍びて。十六夜
かけて十六巻の素書を一字も残らず写し取り給ひける。然るに主法眼ハ斯
る事とハ夢にも不知。御曹子が姫の方に通ひ給ふ由を聞て。大に怒り
捨ておかじと思へども。別て寵愛の姫が恋人なれば。表に害せんも姫が身に
変ありなんと怖れ。不知人に討たして捨てやらんと思ひ。其身既に年老て
行歩意に任せず。且陰陽道を修せしかど。道の誅
殺害せる事を忌。天晴心利たる者もがな。暗に彼若者を討せなん
と思ふ事すら其人物を需けり。爰に其頃北白河に湛海房といふ者有

兼て吉岡が門弟と成て。兵術に委しき上。五十人の力有て人を殺事虫を殺がごとく。然も心姦悪にして。淫酒に荒み。仕官も心ならずして主を持ず。意の侭に振舞けるが。是も法眼が姫を見懸し。吉岡の聟となりて。其業を継。天朝の御師範ともならんと。法眼に阿諛たりしに。御曹子と姫と私通有由を聞て。湛海忽ち心火盛んに燃嫉妬の思に胸を焦し。如何にもして凛を失なはやと思ひ。法眼に見侫舌を以て種々と讒しけれども。法眼度に船を得たる心地して言けるは余に物を案過して。御辺の在事を忘けり。吾も頃日きかうが不義の趣を聞て安からず。討て捨ばやと思へども陰陽道のなしひ躬人を斬事能はず。今日迄黙止たり。御辺今宵五條の天神に待伏して凛を斬て捨まて凛が首を予に持参けれ。年来御辺が懇望有素書を傳授せんと言ければ。湛海雀躍して大に悦び。世に八幸も

多年の所存幸なりとて。なく〳〵礼謝して思ふ童を切て意路の遺恨を晴すさへ有に。六韜の秘書を授られんとて満足なきことの一義にも及ずす領掌しぬ。法眼亦曰凛が為躰を見るに眼ざし不敵にして剱法をも心得らうと見えて常に黄金造の太刀を佩て身を不放。必ず侵て不覚をな取そと戒ければ。湛海巨口を開て呵々と笑ひ。其秘術を振ふで天魔鬼神なりとも。手並にて侵しはべし。況や彼程の小童一太刀にハよも足はし酒を温て待の間。御肴にハ凛が生首を進せんと。飽迄大言し。頓て宿所へ馳帰り。心得たる己が門弟五六人を拘て日暮を遅しと待居たり法眼ハ策成就せりと獨笑し。御曹子を招寄ければ。牛若君ハ何事やらんと法眼が居間に到りたまへば。素絹の衣に袈裟かけて経机の上に小法華経五六巻置て一の巻を開て讀誦し居たり。御曹子座に着し給へば何事のゆゑと問たまへど。法眼経机を押やり。御曹子を近く招き御耳に

頼㒀一義あり。其子細ハ吾老門弟に湛海といふ者あり。然て天朝より
預奉る所の秘書を懇望して不已。さりとも猥に傳授すべき書に
あらざれバ事を左右によせて辞しに彼深く遺恨に思ひ吾を失ハ
でも彼書を得んと其謀既に熟なりし。吾曾て彼を怖るゝにあら
ざれども陰陽道の疑に人を害する事を誡しめば吾手を下さゞりし
御辺ハ若年といへども武略衆に秀られて謀を回し彼を討取て吾心腹
の患を拂ひ得させバ然らば其功にめでゝ六韜の巻を傳授せんと
欺なりしが御曹子心中可笑其書ハさりや吾肺肝に深くあるものを
が今吾に命ずる所ハ都て偽にて姫と私通せしを腹黒に思ひ吾
を死地に陥んとの巧みなるぞ憎さも憎し湛海が首を斬て鼻明せ
んと笑を含み給ひ何事にやと思ひ待しに宜安き御事なり
安りまじ其者の髭首取て御目にかけ候ハん然し渠が何国にて

いひきや。法眼點首渠此節五條の天神へ参詣せらるよしなりしに今宵
天神に待請て討べしとぞ指揮しける。御曹子心得候とて退き姫が
許へ到て某今夜五條の天神へ参り候事に寄て暫く見へまいらせず
といへど御暇乞のため参り候と仰せらるゝに姫打驚き天神へハ何のために参せ
たまふぞと問さまだもよ師の高弟に湛海と申人有しが彼者深く師
を怨む事あるによりて冦せんと巧みましぞ何卒彼を討て得させよとの仰に
より此夜五條の天神にて彼と雌雄を決せんため参るなり。勝負の
習ひ不運にて渠がためにうたれなバ今を限の對面なるべしと打志をれて
曰ば姫をよくよく泣伏。難面の父の心かな君に曰し事ハ皆空言にて候ぞ
君を湛海に討せんとの事なるべし。今日の昼湛海来り。酒たうべて謂しを
め申うに其語ひのまゝに一太刀にハよも不足と言ながらその漏聞えしを
以て思知れバ。彼湛海ハ殊に父と睦しき人なれバ恐らくハ思もよらず

量に妻が拙書を見せ参りし事を伝聞て。斯悪ミぬると覚ゆり此上ハ何国へも落延て難を避まへしと洞なからに言るまで。御曹子打笑たまひ賢しくも察しゐひしかは我もさすてに知らり去なから。彼湛海如何なる呼嘻の者なりとも討取んと風の紅葉を散すよりもいと安し必ず彼が首を提て皈来ん。さまで師亦奈何なる謀を設け我を害せんと計るりんも知がたくはまで皆く姿を隠し玉へ御身の真心を知で我實名を今顕し参らせん吾ハ左馬頭義朝が末子九郎義経といふものにて頻に鬱憤の旗を翻し平家を追討して世に出御身と永くそひ参らせんものからこ人にハ洩しのたひそと語りたまへバ。姫斜ならず歓さまにて社由ある君とハ見奉りされ必ず御詞の末違させ玉ふなとて。尚細々と御契約有て。御曹子ハ五条へぞ出行たまひける

白河湛海寅期之條

頃ハ十二月廿七日の事なるが。御曹子ハ湛海が首取て。法眼に奥閑せんと白綾の小袖引重ね精好の大口に唐織の直垂敷妙の腹巻志め例の薄緑の太刀佩たまひ五条の天神へ参詣したまひ何卒湛海を事故なく討せ玉へと御祈念終り辺を見たまへバ怪しき者も見えざまで扱ハいまだ早かりけりとて。年経る楼の大木の枝葉茂りて木蔭暗き所に立隠て。疾来ようしと待たまふ茲に湛海ハ彼若人を討取んと心刊る門弟五六人に腹巻させて前後に歩ませ其身ハ渇布の直垂に藤縄目の腹巻して。夷物造の太刀佩たりし。草にて柄鞘推包し刀をまちとさし長刀の鞘をはずし。真中取て小脇に掻込五十日とそらぬ髭熊がらに鉢巻しめたり。六尺四五寸の大兵なれバ雲突如くにぞ有ける。湛海頓て五条の天神に詣し。神前に額附て願ひくるを彼小男を左右なく斬せのまへと祈念しける。御曹子木蔭より是を御覧し。飛出て斬たまひやと

白河の湛海最期の圖

思召どもれ。流石に神前を汚さんも恐有とて。潜に社内を出て下向の
道に待のまふ。湛海ハ社内を其許此許と尋ねど似たる者もなければ
社僧に向ひ箇様〱の小男ハ参りハひりけると問に。半時余り以前に
参られ。疾下向ハと答へぬ。扨ハ延引して討洩したるよと心焦立定めて
法眼が方へ赴つらめ。追かけて討取やと犇て。周章く社内を走出今出川
さして馳んとするに。道の傍なる木蔭より御曹子悠と出玉ひ如何に
湛海。吾茲に在て待事久し。疾首さし伸て観念せよとぞ曰ける。湛海大
いに悦び討漏せしと思しに。渠躬名乗出しハ。已と火に入夏虫に似しく宿
運既に盡期なり。是併ながら神明の加護によるならんと呵〱と笑ひ
人も多きに白川の湛海が手にかゝるハ。日本一の果報者なるか。一太刀にハ足
ぬ者ながら名乗出しが健氣さに。長刀に乗て得させんと言儘に。社僧
ゟ借長刀水車の如く回らして。力足蹬〱と踏鳴し斬てかゝるを。御曹子

薄緑の太刀抜持し。静に向ひ合せ丁々ちうちと打合けるに。湛海を唯一討と
思の外。其早業に心後きて。周章眼を賦て斬立しに何とかし久長かせつしと
蹴上られ吾手の二足三足立退所を。御曹子透早く係つと倚て。湛海
が首水も溜らず撃落しけるに。湛海が門弟ども此早業を見て。大に恐怖し
さしもの湛海すら如斯我徒何ぞ及るべきと。散〱に迯行を憎き奴原
一人も余すまじと追かけ追〱二人迄斬伏けるに。残四人ハ雲霞に迯のび
て。辛丸命を助りける。御曹子ハ三役の首を提て。徐〱と法眼が邸
へ赴けるに門を鎖し橋を引たり。迚も案内すとも開まじき事を察
しけるに一丈余の堀をひらりと飛越八尺ばかりの高塀を身を飜し
て刎越けるに。眞に小鳥などの戯る如くにぞ見えける。御曹子ハ[illegible]
に入て窺ひけるに。侍どもハ不残熟睡して。鼾の聲所々に[illegible]
寂しと間寂くを通をたどりて。法眼が居間を差し[illegible]

ず。法華経の二巻が陀羅尼ばかり。此奥笑て独言たるまで。彼に童目がら望と
たる六韜の兵書八字も不得読入今や湛海が為に露の命が頼らん
可憐さいとと念仏西五遍唱たる。御曹子聞召ひて。あら両悪や師弟の
礼が思はずと舌根切下てんさえをのし思召ども。心が鎮て障子引開て
飯りはひぬし作たまで。法眼卿天下一物も言得ず。御曹子八経机の上なる巻
物押ゆり。鮮血に染たる三役の首が並置。御頼あつまし白河の湛海が首
元に加勢の者乃首二役討取ぬ。尚四人なりしといへども言甲斐なく逃行ぬ。ひ
左其侭にお捨あきてん。今は師乃眼中の病癒はひとえん。契約のごとく六韜三
略乃御伝授ひ頭なやぐを作なさつしとの法眼顔色土乃如く。忙然として
在しが。猶胸が鎮めて。いかしくも許しひたるうえ如何にも伝授をなされども
朝廷より預奉る秘書なまで。私には叶がたし奏問ゆて後に兎も角
んなさるぞと善へたる。御曹子完尓とお笑あらひ。童さくらが

預めしく。優くし起て廣庭へ下立堀も越ゑて越て山科へかゝり
去入たる。法眼此躰が窺ひみて。袁に腕に湛海が討取しも理なり是
凡人ならず。天魔乃変化なとし嗟嘆して止にけり

武蔵房辨慶由緒之条

且説其頃洛中が俳徊する。天狗法師と異名ある者あり。原来叡岳乃
西塔にて放逸しければ賓名が武蔵坊辨慶とぞ名乗ける。偖其素晋が
尋るに天津児屋根命の苗裔中関白道隆卿の後胤。熊野の別当弁正
なる者の如く魁名が鬼若と呼ばてたる者なりたる渠が由緒を探に往日二
位大納言某卿しや。御男子我を持たまひしが。宿因乃然ならしむる所にや皆世
が早うしのひしらべ。御悲歎の涸乾く時なく。此上は神明仏陀乃御加護
にあらざまで為でしと。熊野三所権現に祈願が籠たまひし其感応に
や齢長て一人の姫君が没まあひたり。御両親乃御悦大方ならず。寵

大切ふ育あるひしが生長ふ随ひ美貌天下ふ無雙美人ゆゑく渡せるへで
彼竹取の翁が得てし赫夜姫乃如く傳つて御寵愛斜ならず。さるまで
月卿雲客乃公達其佳色ふ泥ミ我もくと望すへども大納言更ふ許し
玉ハず。然るふ右大臣師長卿眤ふ乞望玉ひしかバ己事不得許諾有し
雖其年も東方も忌事あるきむ。婚儀も明年乃事と約定ありけり。扨
姫君深き宿願有とて五條天神へ御参籠有けるふ其の夜より俄ふ寒
風吹来り。姫君の御身ふ中と等く。忽ち物狂しく成のたひしかバ。人く大ひふ
驚き御殿へ伴ひ皈り。其由言上ありけるふ。大納言以の外ふ驚きさるひ
典薬頭が醫療手を盡しあへども。露許乃験もなかりしかバ陰陽
頭ふ占せるふ。是佛神の御祟なりとやぬ。扨まて熊野權現ふ祈誓しく
浩ふ美人が授ヶ奉りなれバ。姫君が未だ三熊野へ参詣させ奉
さるか御祟なるめと。とりくヤふより。俄ふ熊野へ御代参が立られ。

病氣平癒させ玉ハバ。姫が三熊野へ参詣させ。神恩が謝し奉らせ。緒の法
施が奉らんと申させ玉ひしかむ。權現ハ納受させ玉ひけん日が追て物狂
御平癒せさせ玉ひける。御両親ハ言ハさらなり。師長卿ハ深く御喜悦有
て。則姫君が熊野へ参せ奉らんと。行粧善美が盡し。都が啓行あるふぞ
右大臣師長卿よりも百余人が雜式が副らきけり。斯て道中恙なく熊
野へ著せ玉ひて。緒乃法楽法施が捧げ。姫君も本宮乃清浄殿ふ
て御通夜あらせらる。然ふ當山の別當定正ハ。祈の事有て内陳へ
入けるふ幽なる燈乃影ふ姫君の容顔艶麗なるが見まゐらせし
も行徳高き身ゆれも忽ち煩悩心萌し。世ふも浩ぅか美人乃在けるよと
恍惚としく見惚しが。今ハ中く邪念禁しがたく。急ぎ下山して大衆が
集へ今内陳ふ参籠しまふ姫君をて何なる御方乃御息女ぞしとゝふ
一人が曰彼社二位大納言乃姫君ふて。右大臣師長卿の北乃方ふ定まり

のへるゝぞくはとそ答へける。別當聞て。彼姫右大臣と婚儀の御契約を有なから未だ入輿有しとハふかもあらず。吾彼姫が懸想しくて戀慕の念胸が焦せり別當が思ハ人若大衆達る。路次ふ埋伏して。彼姫が奪捕て吾ふ得させれへと言ふぞ。大衆大きふ驚き。人を人ふ往よ是一山の別當職たる人の殊ふ年老て斯る不法乃事が作出さるゝる。天魔の所為う外道の障碍う。彼姫が奪捕バ朝廷の御怒ふ觸別當ハ言もさらなり。一山の安否如何あらんも知がたし。此義ハ思止てのへと。口毎ふ諫言をとれども。別當中〻諫ふ不從よりや佛敵朝敵ともなるむるの乱命ふうえとも彼姫が奪てハ不止。もし朝庭より征兵が差向らきを潔く斬死せんものし更ふ変ずまく躰なきこぞ。逸雄の若大衆等。ち往ふ思捨るふ於他ふ刃て難が避んとするも等ま[illegible]の好てなきぞふ似るり[illegible]日小京勢攻來なば一山乃衆徒の手並が刃ん[illegible]度も退立んし前後ハ

思慮ふも及ざず。ゑもしく鎧一縮して。得物く[illegible]が追取足掲よ[illegible]ふ埋伏し。今や来ると待うけたり。姫の方採乃人〻ハ斯る事とハゆめふも不知姫が輿ふの世奉り。發言して下山まる所よ。思もよらぬ左の傍より。若大衆ともが蒐り立無二無三ふ従者輿丁が撃散し。難なく姫が奪ひ別當乃坊へうた行く渡しうれぞ。別當大いふ悦び一室ふ篭をく。番人多勢ふ守らせたり。姫ふ従ひし青侍雑式ハ大いふ騒ぎ。趾が知たるを討殺し。憶病あるハ京へ逃皈て事の次第が訴たまぞ。二位殿右大臣殿も。歯が噛り大ふ憤りぬひ朝庭へ訴のへぞ。帝も其狼藉を深く悪ませぬひ別當が罪が糺よしの宣旨が賜り。二位大納言右大臣しのが大将とし。河内和泉伊賀伊勢乃兵七千余騎ゐく。熊野へ發向まほしめの是を熊野へゆのえたまぞ。兼て期しうる若大衆ふ。手五百騎が[illegible]切部王子山ふ出張して。一箭射んとぞ待うけうり。官軍程なく押寄て

頻く箭合し。喊を造て攻立る。されども衆徒ハ切所を前に當て
ふせぎしも恐れず。矢頭を双べ散々に射かけ[illegible]せ疾む所を擇て
下里首よりかゝつて追落す程に官軍若干討れて引退ぬ。是より合戦
數度に及べども或ハ勝或ハ敗して甚しく勝負もなく日を過しけ
れバ斯ては果じと都へ早馬を飛し。加勢を乞事頻なり。朝廷にも評
商議有て。別當の狼藉其罪遁がたしと雖。唯此義に就て熊野一山を
亡せんこと。權現の冥慮の程も恐あり。何卒一旦の罪を宥られ。双方和睦
あるまほし。原来彼別當ハ天津児屋根命乃苗孫中関白道隆の末葉
なればこそ二位大納言乃聟となすとも愧しからず。右大臣ハ先立て内々
まうる。平宰相信成の娘。無隻國色なれバ是を賜りて師長も遺恨に
かんとの僉議有けるに此議然るべしとて早馬を飛し。熊野に[illegible]せ
二卿の方へ右の旨を渡し。大衆の方へも仰有ければ。大衆ハ原来婚[illegible]

戦ひなりしかど。偏に厚よし須掌し。二卿ハ不本意に思へども朝廷の御商議
の上なれバ是非なく已事を不得兼伏有ければ。發動忽ち鎮りて衆徒も我
衣を[illegible]ずして事ハ上洛しければ。別當大かたに悦び京都へ登て朝恩を謝し
改て二位殿の聟となりければ。扨も似合しからぬ婚姻かなと世人腹を
抱て笑ひ誹れども。別當ハ耳にもかけず。旦暮姫が傍を放れず別離れざる
小姫も意に八條殿の子なれども。縦に唯ならぬ身と成りければ。辨正が悦び
譬に物なく六十一歳にして初て子を儲る事の嬉しさよ男子ならバ
佛法の紹を繼せんと。出誕の日を待けるに。定まりし月にも産まずして
一月延々二月延て遂に十八月目に出産しけるが殊に大難産にて。姫ハ
苦痛に堪かねし。産所乃裡にて空しく成にけり。別當此由を聞て悲歎限り
なく。昔時の漢帝の悲しみ。楊貴妃が亡し唐王の歎もかくや
我身乃上となりぬ。老乃杖を失ひたるが。然るに生れ出し者を如何なる

鬼若丸乱行乃圖

ども同じ。其形三歳許の小児の如くにて。産まながら能歩き髪ハ肩の隠るゝ許生奥歯向歯悉く生え。色飽迄赤くして猛き事。別当大いに驚き是鬼子なり。かゝる者を育なば。仏法の仇とや成らん。深山の奥海の底にも捨よ。見も忌ハしとて怒る。茲に山井三位と申せし卿の北の方ハ弁正が妹にて。産婦おはらひの為熊野へ下り居たまひしが。此由を聞て深く憐み。弁正を諫めたまひけるハ出継の児異形なるを憎みて。捨たまハんとの御憤り理有に似侍れども。親となり子と産るゝも宿世の因縁にて侍べるそのを失ひ玉ハんハ後世の御為も悪しからん。世に形の醜き者もさる多く侍り。月を帯て産れし人も少からず。釈迦牟尼仏ハ摩耶夫人の腹に三年迄妊れせ玉ひ生るゝから歩ミてもの言ひしとや。是のミならず老子ハ。八十年が間胎内に有て。産まれ出しと生し髪皆白髪なりしとぬにも書伝へ侍れど。十八月を経さのゝ性とも申ごとし。捨ると思ふ妾に賜りり

ハ。京へ倶して帰り上人となしまく。三位殿の世継もなし。初心荒々しくも。法師ともなし。経の一巻をも読習せ侍らば。母姫君の菩提彼児の仏果の縁とも成侍らめと。擾口説慰させたまひければ。弁正兎も角もとて許容しけるにぞ。悦びて乳母と倶に京へぞ伴ひたまひける

鬼若乱行 并 剃髪改名之条

扨も山井殿の北の方ハ。別当が児を乞得て都へ倶し。三位殿にも一五一十と語て睦まじく養育ありけるに。実も光陰の停まらざる事。奔箭流水のごとく。彼児早五才になりけるが。同余の児の十三四許に見えけり。六歳といふ夏。甚重き疱瘡を病て。其跡菊目石の如く。色も黒くなり。髪も赤黒く肩過ぐる迄生たれば。なほさら鬼の如くなるにぞ。誰が号ともなく鬼若とぞ呼ける。三位殿も是雅悪さげに生立ぬるとハ思ひけりしに。倆呆ある心遊も人に倍り者に成べしとも思さねば。法師にせんに不如とて。叡山の西塔の観

慶阿闍梨の方へ登し。此児形こそ媿悪けれども。心ハ正路なる者にはべれバ。御徒弟となし。経論の端ばかりも学ばせ。萬一心悪き業なからんバ。如何やうにも折檻を加へ玉へ。たとひ折鑑の笞に命を失ひ候とも苦しからずと。偏に頼み進しおくぞ。阿闍梨も不便に思はれ承引有て。膝下に置手跡素読なんど学ばせられしに思ひしよりハ智恵有て。手跡も素読も余の児よりも早く上達し。三四年が間に学業抜群に進み。歴々の僧徒も経論の理解に及びがたきハ鬼若に不及こと多かりしかバ。一山の衆徒驚歎し。人ハ形の美悪によらざるものと賞美せるほど。師の坊も末頼母しく思はれ。益心を入て教導ありしに。鬼若漸く勤学に倦。よりより児小法師を語らひ。人も通はざる御堂の後の山奥へ伴ひ行。腕押首引相撲力持なんど。種々の悪戯をなし。元来天性の強力あれバ。誰しも鬼若に勝る者なかりけれバ。世に面白き事に思ひ。大勢を對人にして。種々の力競をなし。撃倒し踏のめしで。疵付く者少からず。衆徒此事を聞て大に怒り。鬼若己が悪戯せるのミならず。他人の勤学を妨げ剰へ疵付る事こそ奇怪なれとて。観慶阿闍梨の許へ。鬼若が悪行を訴る事引もきらず。阿闍梨殆どこまりはて。鬼若を度々叱懲し折鑑せられけれバ。師の前にてハ屈伏の躰をなし。其告来りし者を敵のごとく怒り怨み。矢庭に其者の房へ走り込。門戸障子の嫌ひなく。拳を固め散々に撃破り。或ハさゆる者を打擲し。狼藉法に過たりしかバ。衆徒益怒り憤り。鬼若を撃倒さんとすれども。彼が力量に及ぶ者なく。却て手痛目にあひければ。唯對手になる事をとゞまり。路次にて行合ても不知顔にて脇道へさけかへし。疫病神の如く忌悪ければ。鬼若ますます是を胸悪く思ひ。端なく行逢時ハ取て押へ。先日より逢ざりしに。かく成形にて脇道へ避しハ何の遺恨なくやなんど。終ても同じ果ハ散々撃のめしければ。衆徒集會し。西塔の鬼若こと日々に積る悪行増長し。言語道断の挙動譬ふるに物なし。彼ハ熊野の

別當が子ゆゑ。養父ハ山井殿祖父ハ二位大納言殿師匠ハ當山乃学頭にて。人並よりも寄有者なれど。不見顔して咎めざるに今ハ如何なる不法をなさんも量がたし。所詮衆徒一黨より。觀慶阿闍梨に鬼若を退出させ左なくバ禁獄せんハ如何にと議したり。衆徒皆忌憚事なれバ一議にも及ばず。是社願所なりと。列坐義伏なしたるにより。即連印の訴状を認め阿闍梨の許へさし出しけるまゝ。大に氣毒に思ひ衆徒をまねき種々と詫言し。彼者の狼藉ハ此方にもよくあまりしかされども山井殿より悃乃御意を添られたれバ。追さんも如何と。今日迄默止ぬ。此上ハ禁足申付をし用ひねども。其時退出しいへ。是迄ハ愚老に免じ救されいへと佗るにぞ衆徒も領掌して引とりたり。觀慶阿闍梨鬼若に彼訴状を見せ散々に叱り愧しめ。以後ハ禁足たるべしとて。一間所に押篭敢て出しおハざりしかバ。鬼若大いに困果是皆衆徒原が所為なるべし。如何にもして讐を

報んと。一夜潜に一間を忍び出塀を越て外の方へ出てまづ其の掛木を引抜坊々の門戸を打擲き残破て狂ひ廻れど。大衆大いに驚き恐怖て須破鬼若めが荒出しぞ。近付て怪我するなと。唯逃隠て為が儘に打捨おきぬ。誰出合ものゝなければ。鬼若ハ思ふまゝに狂ひ回り。あくる心地よやとよく己が房へ歸りしが。今ハ師匠も此山にハ置まじと思ひ。美作の律師といふ人乃湯殿に走りて。百合剃刀をとつて。みづから頭剃回し。傍に掛ける古衣著して。水鏡に影を寫しみて。天晴我ながらよき法師よ。うち眺めしたりて鬼若にてハ叶まじ。我名を何と言ましと思ひけるが。屹と心付昔此山に武蔵といへる荒法師ありしが。放逸に挙動ければ。六十一歳の天寿を保ち端坐合掌して大往生乃素懐を遂しと聞。我も佛縁あらバ斯法師となりて成たんものを。彼武蔵が跡を追て。武蔵房と名乗らん。又辨止の縁の字と。師匠觀慶の慶乃字を用て。辨慶とこそ名乗ましとて。別なり

戒所も頼だ往已と已が戒師となり生年十七歳ふく住持し西塔を立出小原の別所ふく山法師の住捨たる荒坊ふ遁しむるとふおくく住居なり。觀慶阿闍梨風ふ此由聞のへども彼が出行し八一山の幸ひありとく不知顔ふく棄置のひなれ

義經勲功圖前編巻之二畢